OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	感動詞の高さの動きから見る日本語の会話表現のイントネーションの特徴
Author(s)	郡, 史郎
Citation	大阪大学言語文化学. 2018, 27, p. 69-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71227
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

感動詞の高さの動きから見る日本語の会話表現のイントネーションの特徴*

郡　史郎**

キーワード：「はい」のイントネーション、「うん」のイントネーション、アクセント・イントネーションの逸脱

In this paper, the phonological nature of tonal movements in Japanese interjections is examined. Contrary to previous analyses, most cases of non-falling movement are shown to be triggered by sentence-final intonation rather than by lexical accents. This paper also demonstrates that conversational expressions that include interjections occasionally use tonal movements that violate the normal rules of accent and intonation. It is also discussed that the use of these irregular movements when making sincere requests and responses is inappropriate.

1 はじめに

本稿では、会話に特徴的な音の上がり下がりとして、感動、応答、呼びかけの意味を持つとされる[1]感動詞に見られる高さの動きと表現機能の関係について考察する。対象は首都圏中央部（概ね東京 30km 圏）での現代の言い方である。

感動詞の高さの動きと表現機能の関係については、すでに須藤潤氏（2008 等）が、高さの動きをアクセントとイントネーションに分解した上で、入力情報の処理過程という観点から整理している。本稿は、高さの動きの分解のしかたについて須藤論文とは異なる解釈を示す。須藤氏はアクセントで説明できるものはアクセントと見ておくという立場だが、本稿では、アクセントと見るのが妥当な部分はアクセントとしつつ、イントネーションによる解釈を積極的に取り入れる。結果として、須藤氏が平板型アクセントと見る音形の多くをイントネーションと見ることになるが、そのことで、異なる感動詞に共通する高さの動きと意味の結びつきの類型をイントネーションの類型としてうまく整理できると考える[2]。

---

* Tonal Movements of Interjections and Conversational Intonation in Japanese（KORI Shiro）

** 大阪大学大学院言語文化研究科

[1] 橋本進吉氏（1959）。

[2] なお、森山卓郎氏（1997）も感動詞を含む一語文のイントネーションについて興味深い考察をしているが、分析の枠組み、事実の認定の一部と解釈のしかたは本稿とは異なる。

また本稿では、感動詞を含め、会話表現の中には本来のアクセントや文イントネーション規則を外すものがあり、そのことでその表現に特別な意味合いを持たせていることを指摘する。そして、依頼や応答の表現ではそうした言い方は不適切になりうることを述べる。

高さの動きの記述は、文内イントネーション（アクセントの実現度）については郡史郎（2003）、末尾イントネーションについては郡（2015a）とその改訂版である郡（2016）の枠組みを用いる。用例は表音カナで表記し、以下の記号を高さ変化の開始点にもっとも近いところに付ける。「：アクセントによる音の上げ、┐：アクセントによる音の下げ、‖：イントネーション句の切れ目、/：ポーズ、↗：疑問型上昇調（連続的上昇）、↑：強調型上昇調（段状上昇）、→：平坦調、↷：上昇下降調、↓：急下降調、p：音の上がり方が小さい。

2 感動詞の高さの動きに見られるいくつかの傾向

感動詞すべてに言える話ではないが、表現機能と高さの動きには一定の対応関係が認められる。理解や納得ができないときに使う感動詞は全体が連続的に上昇し（あら、おや、はあ、えっ）、力をこめるかけ声は最後が一段高くなり（よいしょ、どっこいしょ、そーれ）、感心したとき（へえ、ほう、ふーん）や考えこむとき（あのー、うーん）は最後を長く平らに言う傾向がある。肯定や承諾の合図（はい、ええ、うん、ああ）は内部で音が下がる。

しかし、この中には個別の単語固有の音形、つまりアクセントと考えるべき動きと、文末一般に見られるイントネーションがかかった音形と見るべき部分が混じっている。日本語では基本的にどの単語にもアクセントがあるが、感動詞にはアクセントがあると言えるか判断しにくいものがある。実用的な観点からは個別の上がり下がりがわかればよいが[3]、それを整理して体系づけようとするならば、アクセントで説明するのが妥当か、あるいは、どの部分がアクセントでどの部分がイントネーションかを考える必要がある[4]。たとえば、肯定・承諾の「はい」が中で音が下がるのは、イントネーションではなく単語固有のアクセントで[5]、気づいたときの「ああ」が中で音が下がるのは、平板型アクセントの「あ」に急下降調のイントネーション（新事態の認識表明）がかかったもの

[3] 浅田秀子氏（2017）のような記述。
[4] 筆者の現時点での整理結果では、大多数の感動詞にはアクセントがあると考えて矛盾は生じない。ただ、安堵やため息の「ふう」「はあ」に見られる音の高さの動きは、息が弱まればその弱まり方に合わせて高さも下がるという生理現象であり、アクセントとは考えにくい。
[5] 音が下がるものがみな肯定・承諾の意味でないことは、「まあ」「おっと」「よいしょ」「おい」「こら」「ほら」を見れば明らかである。

と考えるのがよさそうである[6]。以下、個別に考察を加えてゆく。

3「はい」の高さの動き

「はい」にはさまざまな使い方がある。これを、応答のことばかどうか、応答ならば何に対するどのような内容の応答かという観点から整理すると、ⓐ肯否を問う質問や確認求めへの肯定的答え、ⓑ依頼や勧誘の承諾や、指示や宣言の了承の印（「お願いします」「帰りましょうか」「行きますよ」などへの返事）、ⓒ聞きとれなかったときや、相手の意図が理解できない印、ⓓあいづち、ⓔ合図のかけ声（「はい、チーズ」「はい、次」など、自分が進行を決められる立場にあるときに、そこまでのできごとの流れを切って、新しい場面への切り替えを宣言する）に分けられる。

「はい」の高さの動きは、用法ⓔの場合は、全体に疑問型上昇調をかけた［↗ハイ］だが、それ以外は、［イ］の前で音を下げる言い方、つまり［˥ハ˩イ］が典型的で、どの場面でも使える中立的な言い方だと思う。その変異形として、［ハ］を伸ばす［˥ハー˩イ］もある。これに加えて、下げずに［˥ハイ］または［˥ハーイ］とする平らな言い方がある。

平らな言い方には快諾性が感じられるが、真摯な対応が求められる場面では使いにくいことがある。たとえば、「迷惑なので、やめてください」とか「〈私と〉結婚してください」に対して平らに［˥ハイ］あるいは［˥ハーイ］と答えると、頼んだ側の人にとっては、自分の言いたいことを相手が本当にわかってくれているのか、本気で答えているのかわからず、不安にさせることになりかねない。長く伸ばす［˥ハーイ］だと特に印象が悪い[7]。

次に、［ハ］から［イ］にかけて下げる言い方と平らな言い方について、それらはアクセントかイントネーションかという問題を検討する。

3.1 下げる「はい」とアクセント

結論から言うと、［ハ］から［イ］にかけて下げるのは、イントネーションではなく、

---

[6] 短い「あ」の場合、「あ、猫だ」なら頭高型アクセントの「猫」の［ネ］にかけて「あ」から音が上がり、「あ、犬だ」なら尾高型アクセントの「犬」の［イ］にかけて「あ」から音が下がる。これは、「詩、か（書）いた？」では頭高型である「かいた」の［カ］にかけて「詩」から音が上がり、「詩、かける？」では中高型である「かける」の［カ］にかけて「詩」から音が下がるのと並行的である。「詩」と［カ］の高さの関係は「詩」の平板型アクセントの性格によるものである。尾高型の「絵」なら「絵、か（描）いた？」で「絵」と［カ］の間に高さの谷ができる。感動詞の「あ」が高さの動きの点で「詩」と同じふるまいをするのは、「あ」が平板型アクセントを持っているためと考えるのが自然である。

[7] 首都圏ではないが、近畿圏在住の大学生 27 名を対象に、質問に答える、依頼を承諾する、勧誘を承諾するという 3 つの場面での応答として、14 種類の音形の「はい」を聞いてもらったところ、答え方の態度としていつでも印象がよい（>80%）のは、短くて下がる［˥ハ˩イ］だった。短くて下がらない［˥ハイ］は、全体として特に印象が良いわけではないが、悪くもない。長くて下がらない「はーい」［˥ハーイ］は、よい印象がほとんどない（<25%）。

「はい」という単語に固有のアクセントだと筆者は考える[8]。根拠は次の3点である。

まず、(1) 人なら誰でも口を開けた状態で音を出すと生まれる［ア］のような単純な音とは違って、［ハイ］という音は現代日本語の単語だと問題なく認定できるような音の構成になっている。そして、文脈から切り離した［ハイ］という音を聞いても、日本語を知らなければそれが肯定的な返事のことばだということはわからないだろう、つまり、音と意味の結びつきの恣意性が高いわけである。したがって、返事の「はい」はふつうの単語の扱いができ、したがってアクセントがあると考えるのが自然である。

(2) 下がる「はい」は、呼ばれた返事として音を伸ばして言う場合、特に遠くに向かって答えるときなどに［˥ハー˥イ］となりうる。［ハ˥ー˥イ］もありうる。しかし、そのときに［˥ハ˥ーイ］と言うと英語のあいさつ表現のようで、日本語としては不自然に感じられる。これは、形容詞の「こわい」［コ˥ワ˥イ］や「暑い」［ア˥ツ˥イ］のように、明らかにアクセントのために［イ］の前で下がる語は、音を伸ばすときに［コ˥ワー˥イ］［ア˥ツー˥イ］あるいは［コワ˥ー˥イ］［アツ˥ー˥イ］とは言えても、［コ˥ワ˥ーイ］［ア˥ツ˥ーイ］とは言いにくいことと並行的である。下がる「はい」もこれらの語と同じく、［ハ］から［イ］にかけて下がるアクセントを持っていると考えるのが自然だと思う。

(3)「はい」にアクセントがあるとしても、可能性として、それは平板型であり、［˥ハ˥イ］と下がるのは急下降調がかかったものと見ることもできなくはない。しかし、明らかに平板型のアクセントを持つ「なるほど」［ナ˥ルホド］や「本当」［˥ホントー］は、急下降調を付けると［ナ˥ルホド↓ー］［˥ホント↓ー］となるが、それは「なるほど」や「本当」のふつうの言い方とは言えない。返事としての［˥ハ˥イ］は中立的だが［˥ハイ］や［˥ハーイ］はいつもそうだとは言えないことから、［˥ハ˥イ］が返事として本来の言い方だと思われる。したがって、［˥ハイ］が本来のアクセントで、［˥ハ˥イ］はそれに急下降調がかかったものという説明は苦しい。

下げる「はい」について、使用例と実際の高さの動きをあらわす図をあげておく。「1986f」等は話者の生年と性別である。⑩等は郡（2016）と同じ会話資料の番号で、番号のないものはそれ以外の資料のものである。図は、縦軸が高さで、上の方ほど音が高い。縦軸の目盛は50Hzをベースとする半音値である。横軸は時間の経過で、目盛は秒である。

(1) ‖˥**ハ˥イ**˥pソ˥ーデス‖（〈「住んでるのはこのお近くですよね？」と聞かれて〉**はい**、そうです［用法ⓐ］：1986f）【図1】

[8] 須藤（2008）も同様に考えており、ここで本文に根拠として示す2点目についての認識も共有している。青柳にし紀氏（2000）は「はい」の高さの動きを扱った研究で、［イ］の前の下降をイントネーションとして「下降調」と見ているが、根拠は示されていない。

(2) ‖「イ┐ヤー「pモ┐ー‖ウ「レシ┐カッタデス→ネー‖ / ‖「p**ハ┐イ**「ジント キマ┐シタ‖（〈そのときどんな気持ちだったかと聞かれて〉いや、もう、うれしかったですね。**はい**、じんときました［用法ⓑ］：③ 1951m）

(3) ‖オ「ンナ‖┐キ「マ┐シ↑ター┐ッテ‖シ「タノ ホ┐ーカラ‖「ダ┐レカガ‖ド「ナ┐ルノ‖ /（聞き手：「**ハー┐イー**）‖オ「ンナ┐↗ヨー‖ / ‖「ド┐ナタカジャ「ナ┐イノ↗ヨ‖（〈紅白歌合戦の舞台で〉「女来ました」って下の方から誰かがどなるの。（聞き手：**はい**。）女よ。どなたかじゃないのよ［用法ⓓ］：⑦、「はい」は 1988f）

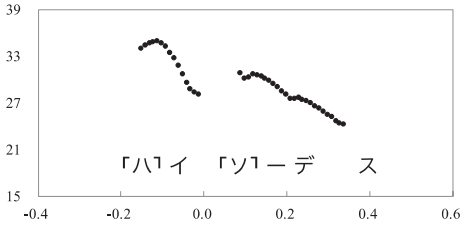

図１「はい、そうです」の［「ハ┐イ］

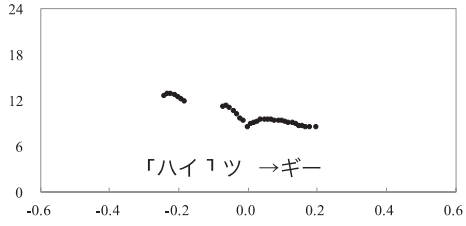

図２「はい、次」の［「ハイ］

3.2 平らな「はい」：浮き上がり調

これに対し、平らな「はい」の高さの動きは、平板型のアクセントではなく、イントネーションがかかることで生じたものと考える[9]。それは、平らな「はい」は下げる「はい」とほぼ同じ意味でありながら、その下げを消して全体を平らにする言い方だからである。感動詞以外を考えると、異なるアクセントを許す単語はいくらもあり、「きのう」のように名詞か副詞かで異なると解釈されているものもあるが、アクセントの違いで表現機能が変わるということはない。表現機能を変えるのはイントネーションである。感動詞においても同様だと見るのがふさわしいと筆者は考える。そして、下げを消して平らに言うのは強調型上昇調の一種である浮き上がり調がかかったためだと考える。

浮き上がり調（川上蓁 1963）とは、「帰ろう」「お待ちください」のように、本来は文末の 2 拍の中にアクセントの下げがあっても、その下げをなくした上で、2 拍全体をその直前より一段高く平らにする言い方である。川上氏は「軽っぽい態度」をあらわすとしている。これは文末の強調型上昇調の一種と考えられる（郡 2015）[10]。

川上氏が主に例にあげるような依頼、勧誘、同意求めの行為で、なぜ浮き上がり調の言い方をするかを考えると、そうした行為は相手の気持ちと対立するものになる可能性

[9] 須藤（2008）はこれもアクセントと見ている。
[10] 強調型上昇調なら本当は［↑ハイ］と書くべきである（郡 2015）。しかし、上昇しつづけると誤解されることを避けるために、ここでは［「ハイ］と書く。

があるので、少し外した言い方をすることで直接的な対立をやわらげようとしているではないかと思う。少し外した言い方といっても、アクセントについてだけでも他に可能性はあるわけだが、たとえば［シ┌リマ┐セン］とか［┌カ┐エロー］のように本来と違うところで下げるよりも、下げをなくして平板に言う方が不自然度が低いと思われる。下げをなくす言い方に一定の許容性があることは、外来語の専門家アクセントが平板型になることからもわかる。

「はい」の場合は、音を下げる形で言うと、中立的である分、場面によっては無愛想できつい言い方になる可能性がある。それを避けるための少し「軽い」言い方として、浮き上がり調をかけて平らに言おうとするのではないかと思う[11]。平らな「はい」の使用は、次の例のように合図（用法ⓔ）の「はい」に目立つが、これは威圧感の少ない言い方にしようとしているのであろう。

(4) ‖┌**ハイ**┐ツ→ギー‖（〈2 人でクイズを解いているときに、1 問が終わって次の問題に移る場面〉はい、次：⑩、「はい」の話し手は 1986m［用法ⓔ］）**【図 2】**

(5) ‖┌サ┐ン‖┌**ハイ**‖（〈歌い始めるときのタイミングの指示〉3、はい［用法ⓔ］）

(6) ‖┌**ハイ**‖（〈出席確認への返事として〉はい：1957 年の『国語教育レコード 基礎篇（6）ことばの調子』ビクター KR-54、話し手は子供［用法ⓐ］）

3.3 聞き返しの「はい」の全上昇音形について

理解や納得ができないときに聞き返す「はい」は、下げないまま全体に疑問型上昇調を付ける［↗ハイ］である。疑問型上昇調の使用は、聞き返しということで理解できる。しかし、先述のように［┌ハ┐イ］の下げをアクセントだと考えると、聞き返すときに［┌ハ┐↗イ］ではなく、下がらずに［↗ハイ］となる理由の説明が必要になる。それは、これが、理解や納得ができないことがあったときに使う感動詞にかかる「不可解イントネーション」（5 節で説明）であって、このイントネーションが感動詞のアクセントの下げを消すという特徴を持っているためだと考える。

4「うん」の高さの動き

応答の「うん」は、口を閉じたまま鼻に声を流すだけの［ンー］か、少し口を開けて口にも鼻にも声を流すように言う、［ウー］に近いがあいまいな音色の鼻母音である。

高さの動きや音の長さはさまざまで、それにあわせて「ううん」「うーん」、あるいは

[11] 応答での平らな「はい」について、浅田（2017）は「相手の質問を敬意をもってきちんと聞いているという返事」とするが、これは下げる「はい」が中立的であることから生じる印象かもしれない。須藤（2008）は「話し手の認識の突発的・瞬間的な変化」を示すと見る。筆者は、真摯な対応をする場面では使いにくい点に注目する。

単に「ん」と書く場合がある。しかし、音の出し方自体は上に述べたものと同じである。ここでは音の表記としてはすべて［ンー］と書いておく。

さて、これを途中で下げる形で［｢ン┐ー］と言うと、肯定や承諾･了承の合図になる。また、｢うん」はあいづちでも使うが、そのときも短めだが下げる［｢ン┐ー］の形が多い。また、最初から疑問型上昇調で［↗ンー］と言うと、理解や納得ができないときの言い方になり、下げながら長く、あるいは下げずに平らに長く言うと、考えこむときの音になる。

4.1 下げる「うん」とアクセント

下げる「うん」の動きはアクセントだろうか、それともイントネーションだろうか。

「はい」の場合は、先に述べたように下がるのはアクセントだと積極的に考えることができる理由が一応ある。しかし、「うん」の下がる動きもアクセントと考えてよいのかについては問題がある。

それは、この音は人なら誰でも、口を開けないまま（少し開けてもよい）鼻に音を流すだけで出てくるものだからである。この音を出す際に高さが下がってゆくのは、息の弱まりにともなう生理現象であって、単語ごとに慣習として定まった高さの動き、つまりアクセントではないかもしれない。

しかし、この音を肯定や承諾を意図的に伝える合図として日常的に使うのは日本語の特徴である。また、その最後に疑問型上昇調を付けて、｢『うん』だって？」の意味で［｢ン┐ー↗ー］と問い返すこともできなくない。こうしたことから、下がる動きはアクセントとしての性格も持っているとは言えそうである。

そして、｢答えは『うん』だ」と言うのときの「うん」の高さの動きは、｢人生は運だ」の「運」のものと変わらない。本来はアクセントでないとしても、肯定や承諾の合図として使われるときは、「うん」に本来的にともなう下降がアクセントの役目をする、あるいは下降がアクセントとして固定化した形で使われると考えることもできる。その場合、「うん」は「運」と同じく 2 拍の頭高型アクセントを持つということになる。積極的な根拠ではないが、本稿ではこの考え方をとっておく。

4.2 否定の返事としての「ううん」の高さの動き：反語イントネーション

肯定や承諾の合図としての下がる「うん」の最後にさらに疑問型上昇調を付けて［｢ン┐ー↗ー］と言うと、聞き返しの意味にもなるが、「いいえ」と同じ否定の意味になる。疑問型上昇調が付く分だけ音が長くなる。首を左右に振りながら言うことが多いかもしれない。

(7) ‖「ソレワ ナ┐ニ‖「サンゴクシマ┐ニアノ　「pヒ┐↗ｐト‖（女性1:それは何、三国志マニアの人？）‖「**ン**┐ー↗ｐー‖（女性2：**ううん**：⑨1972f1、f2）**【図3左】**

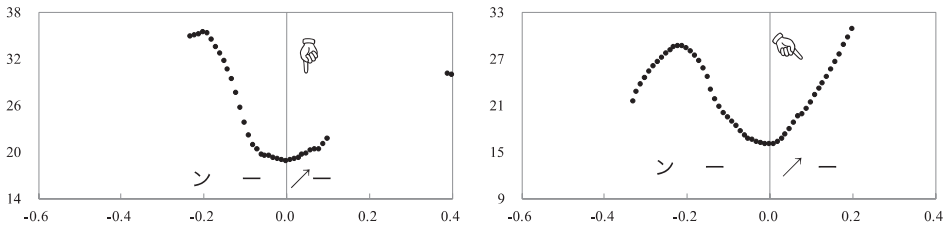

図3　否定の「ううん」の2例

図3の左と右は、別の女性による否定の［「ン┐ー↗ー］の高さの動きである[12]。どちらも口を閉じて鼻から出す音で、左では最後の上がり方が小さく、右では大きい。縦線を引いた箇所、つまり上がり始める前までを聞くと、肯定や承諾の「うん」としてどちらもごく自然な発音に聞こえる。つまり、最後に上げを加えることで意味が変わるわけである。

否定の意味では、音が高い箇所を後にずらせた［ン「ー┐ー↗ー］という言い方もある。そしてこの方が強い否定に感じられる。なぜこうした言い方が否定表現になるのだろうか。

そもそも疑問型上昇調には「私が？」［ワタシガ↗ー］のように、信じられない気持ちをあらわす使い方がある。肯否を問う質問や確認求めに対する応答表現の「そう」に疑問型上昇調を付けた［「ソ┐ー↗ー］だと、否定のニュアンスを帯びる。さらに、音が高い箇所を後にずらせて［ソ「ー┐ー↗ー］と言うと、「そうだろうか、いや違う」という意味、つまり反語になる。この音形を**反語イントネーション**と呼ぶことにする。同じことが「え、もう帰るの？」という意味での「もう」にもある。［「モ┐ー↗ー］だけでも否定的だが、高い箇所を後にずらせて［モ「ー┐ー↗ー］とすることで、帰りたいという相手の気持ちが信じられない、自分は帰りたくないという否定的な意味合いが強まる。「いいえ」の意味での［ン「ー┐ー↗ー］もこの反語イントネーションと見ることができる。

この反語イントネーションには2つ変種がある。ひとつが本節冒頭の［「ン┐ー↗ー］で、

[12] 須藤（2008、2010）は否定の「ううん」の上昇を疑問型上昇調または強調型上昇調と見る。筆者は図3の例は音形からともに疑問型上昇調と見るが、強調型上昇調での言い方も確かに可能である。その強調型上昇調は音声的実現における疑問型上昇調の変種と考える。

これは「そう」の［「ソ┐ー↗ー］に対応する。そして、もうひとつが［ン「ー┐ー］である。音が高い箇所を後にずらせるという特徴か、疑問型上昇調を付けるという特徴のどちらかが加われば否定の意味になるわけである。「うん」の高さの動きと意味の関係を、次節の「考えこみ」を含めてまとめると表1のようになる[13]。

表1　「うん」の高さの動きと意味の関係

「ン┐ー	「ン┐ー↗ー	ン「ー┐ー↗ー	ン「ー┐ー	↗ンー	→ンー
はい	いいえ①	いいえ②	いいえ③	不可解	考えこみ

4.3 考えこむときの長い「うーん」

考えこむときは、音を下げながら、あるいはほぼ平らなまま長く言うことが多い。困ったときなどは高めの声域になることもある。これは7節で説明する「考えこみイントネーション」である。図4は会話例で、クイズの答えがわからないので考えこんだときの音である。低く平らな高さの音を1秒近く続けている。

(8) ‖ワ「カ┐ンナイ↷pヨー / →ンー‖
(〈クイズの答えを考えながら〉わかんないよ、**うーん**：⑩ 1987f)【図4】

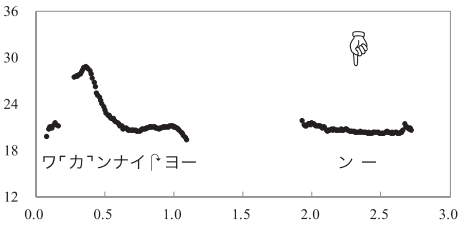

図4　考えこむときの「うーん」

5「あら」「おや」「はあ」「ええっ」などの全上昇：不可解イントネーション

もともと「あら」［「ア┐ラ］と「おや」［「オ┐ヤ］は、予想外の状況になったときに使うことばである。そして、その下げをなくし、全体に疑問型上昇調を付けて［ア↗ラ］［オ↗ヤ］と言うと、理解や納得ができない気持ちがよくあらわせる[14]。このように、理解や納得ができない気持ちをあらわす感動詞は、アクセントの下げをなくして、疑問型上昇調を付けるという特徴がある。これを**感動詞の不可解イントネーション**と呼んでおく。感動詞以外の単語では、アクセントの下げをなくして疑問型上昇調を付けるということは通常ない[15]。これは、こうした感動詞にはアクセントがあるとは考えられるものの、それは一般の単語におけるほど堅固なものではないということであろう[16]。聞き取れな

[13] ここで「いいえ①②③」とした3種類の「うん」が否定の意味に聞こえることは、首都圏成育の4名に確認している。その際に聞かせたのは、図5右の音声を加工して、①＿／＼／、②／＼＿／、③＿／＼＿という100msずつの直線的な動きを4つ組み合わせ、高低幅を1オクターブにした音である。
[14] 須藤（2008）にある［ア「ラ］［オ「ヤ］は疑問型上昇調の上昇が小さいもの、またはその変種としての強調型上昇調がかかった言い方と考える。
[15] 例外として、自分の判断を口に出すときに、形容詞の連用形＋「ない」や、名詞＋「じゃない」の形で相手の共感や同意を求める気持ちもこめる「とびはね音調」がある。
[16] 7節で説明する「考えこみイントネーション」についても同様である。坊農真弓氏（2002）が「うん」

いときや理解できないときに言う「はい」［↗ハイ］、「はあ」［↗ハー］、「ん」［↗ンー］、「えっ」［↗エー］にもこのイントネーションがかかる。

6「へえ」「ほう」「ふーん」などの平坦な引き伸ばし：感心イントネーション

それまで知らなかったことを知ったときに口に出る「へえ」の高さの動きは、［へ「ーー］とか［「へーー］のように、長く伸ばして、最後を平らに言う。アクセントの下げがあっても、その下げをなくす形で平坦調のイントネーションをかけて感心する言い方を**感動詞の感心イントネーション**と呼ぶことにする[17]。「ほう」や「ふん」「はあ」も感心の度合いが強いと同じ言い方になる。平坦調は強調型上昇調の一種と考えられるが（郡 2015）、強調型上昇調をかけた［へ「ー↑ー］［フ「ー↑ン］あるいは［へー↑ー］［フー↑ン］という言い方もある。

(9)（男性）**へ「ー**（女性）**フ「ーン**（男性）ナ「ルホドネ（女性）テ┐ヨ「ブ┐ンダッ↑テ（男性）**フ「ーン**（〈ビスケットとクッキーとサブレの違いを、そのときに女性が読みあげた記事で知って〉：⑩ 1986m、1987 f）**【図 5】**

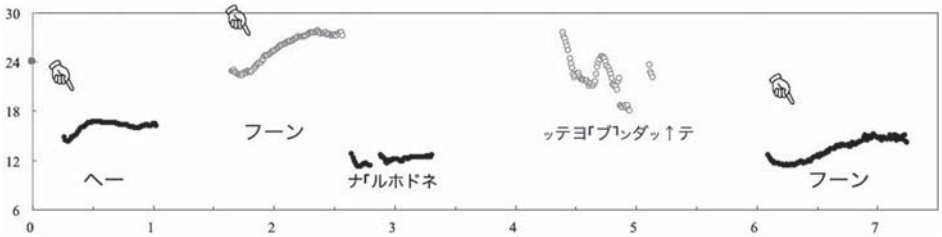

図 5　感心イントネーションの実例：色が濃い方が男性、色が薄い方が女性

7 考えこんだり言いよどむときの平坦な引き伸ばし：考えこみイントネーション

考え込んだり言いよどむときに「あの」「その」「こう」と言うことがよくある。「あー」「うーん」「えー」のこともある。こうした音は、ほぼ同じ高さのまま最後を長く、しかも多くの場合低く抑えて言う。このように、アクセントの下げがあっても、その下げをなくす形で平坦調のイントネーションをかけながら考え込む言い方を**感動詞の考えこみイントネーション**と呼ぶことにする[18]。同じ高さの音を続けるのは、考える時間の分だ

について指摘する「一語性」の低さと同じことがこうした感動詞にも言える。

[17] これらの感動詞は最初がハ行の摩擦音という共通点はあるが、音と意味の結びつきの恣意性は高く、アクセントを持っていると見ることに問題はないと思われる。「へえ」は平板型、「ほう」「ふん」「はあ」は頭高型と考えておく。

[18]「あの」「この」「こう」は指示語の転用だろうからアクセント（平板型）があり、それに平坦調のイントネーションをかけたものになる。「あー」「うーん」「えー」は頭高型のアクセントを持っていると考えられる。文中の文節末でも、考え込んだり言いよどむときに最後を長くして平坦調をかけることがよくあるが、その場合はアクセントに変化はない。

け音を出しておきたいからだと思われる。

危険が迫っているときや失敗しそうなときの「あー」[→アー] も平らな高さを続けるが、やはり長い音を出すことが必要だから同じ高さの音を続けるのだろう。

(10) ‖ナンカ **ソノー** /「チョ˥ッ↷pトー **コー** / **アノー** / ‖ヨ「コニ サレチャッ↷pテー‖ (〈ドラマの役柄の説明〉なんか、**その**、ちょっと、**こう**、**あの**、横にされちゃって ... : ⑨ 1972f2) 【図 6】

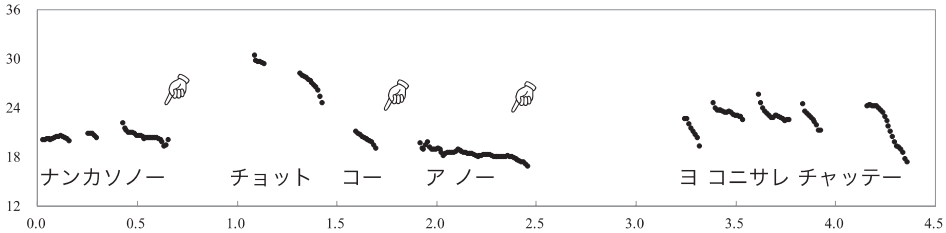

図 6　考えこみイントネーションの実例

8 本来の形から逸脱した高さの動きと、その働き

3 節でも触れたように、「はい」は下げる [「ハ˥イ] が中立的な言い方だが、浮き上がり調をかけて下げをなくした [「ハイ] は、真摯な対応が求められる場面では使いにくいことがある。それは、浮き上がり調が持つ「軽っぽい」感じのためだと思われる。依頼表現でも、事務的な「〈おかけになって〉お待ちください」なら、浮き上がり調で [オ「マチクダ↑サイ] とは言えるが、真摯な対応を求めるときの「〈いやがらせは〉やめてください」や「結婚してください」を [ヤ「メテクダ↑サイ]、[ケッ「コンシテクダ↑サイ] とは言いにくい。

また、下げる「はい」でも、「はいはい」[「ハ˥イ「pハ˥イ] と繰り返すと、やはり軽い感じがする。真摯な対応が求められる場面で言うと、快く引き受けるつもりで言ったのだとしても、相手は「返事は一度でいい!」と怒りだすことがある。

下げない「はい」や繰り返す「はいはい」が真摯な対応が求められる場面にはあまりふさわしくないのは、そうした場面では世間で標準的だと思われている言い方をすることが求められるからだと思う。心からの感謝や詫びが必要なときに、「どもー」とか「お許しくだされ」などと言おうものなら、ふざけているということで相手を怒らせてしまう。イントネーションも同じである。感謝や詫びのように良好な人間関係を保持ないし修復するためのことばは、言い方に気を付けないといけないわけである。

なお、同じことばを繰り返す表現では、2 回めの繰り返しのアクセントは一般に弱め

る。「いつもいつも」[「イ┐ツモ「pイ┐ツモ]、「どれどれ」[「ド┐レ「pド┐レ］はその例である。ところが、「はい」を繰り返すときに、2回めの「はい」のアクセントを弱めない［「ハ┐イ‖「ハ┐イ］または［「pハ┐イ「ハ┐イ］という言い方もある。これは、自分は本当は気が進まないけれども相手の意思を尊重するといった意味合いになる。類例に、「やれやれ」、「わかったわかった」「おやおや」がある。これを**事態の受け入れイントネーション**と呼んでおく。これも、本来の高さの動きを変えた言い方に特別な意味合いを持たせたものである。

本来の高さの動きを変えて特別な意味合いを持たせる他の例として、「きれいな海だなあ！」[「キ┐レーナ‖「ウ┐ミダ↷ナー]、「変な人！」[「ヘ┐ンナ‖ヒ「ト］など、「形容詞＋名詞述語」の形の感嘆文で、名詞のアクセントを弱めないで言うことで情感を強調する言い方がある。これを**しみじみイントネーション**と呼んでおく（郡2003参照）。ふつうなら名詞のアクセントを弱めて［「キ┐レーナ「pウ┐ミダ↷ナー］[「ヘ┐ンナヒ「pト］と言うところである。

また、あいさつ表現の「こんにちは」[「コンニチワ］や「こんばんは」[「コンバンワ］も、「今日」「今晩」の本来の頭高型のアクセントを崩して平らに言うものである（あいさつの平板化イントネーション）[19]。

9 まとめ

本稿では、感動詞の高さの動きを、イントネーションによる解釈を積極的に取り入れる形で整理した。そのことで、異なる感動詞に共通する高さの動きと意味の結びつきの類型を、浮き上がり調、反語イントネーション、不可解イントネーション、感心イントネーション、考えこみイントネーション、事態の受け入れイントネーション、あいさつの平板化イントネーションというイントネーション類型として整理できた。そこには、本来のアクセントや文イントネーションの規則を外す形で付くものが目立つ。また、ここで詳細を論じる余裕はないが、こうしたイントネーションの類型は、浮き上がり調を除けば一般の文には適用できないものである。したがって、感動詞には独自のイントネーション規則があるということが言えそうである。

[19]『新明解日本語アクセント辞典』（三省堂）は解説の66で「『只今！』『今日は！』など、呼びかけの意が強いものは尾高型のように発音される」と説明する。たしかに、「この時間なら、あいさつは『こんにちは』がふさわしい」のような言い方では助詞が低く付く。これをアクセントと考えるならば「こんにちは」は尾高型ということになる。しかし筆者は、こうした言い方で助詞が低く付くのは、名詞以外の語句を引用するときの「**引用のイントネーション**」のためだと考える。たとえば、「『有名な』は中国語でどう言うの？」だと、平板型であるはずの「有名な」の後で助詞が低く付く。

引用文献

青柳にし紀（2000）「イントネーションからみた『はい』の談話機能」『ことばの研究』（長野県ことばの会）11、pp. 25-37.

浅田秀子（2017）『現代感動詞用法辞典』東京堂出版.

川上蓁（1963）「文末などの上昇調について」『国語研究』16、pp. 25-46.

郡史郎（2003）「イントネーション」『朝倉日本語講座 3 音声音韻』朝倉書店、pp. 109-131.

郡史郎（2015）「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』（大阪大学）41、pp. 85-107.

郡史郎（2016）「間投助詞のイントネーションと間投助詞的イントネーション―型の使い分けについて―」『言語文化研究』（大阪大学）42、pp. 61-84.

須藤潤（2008）「日本語感動詞の音調記述の試み―1 音節感動詞を中心に―」『音声言語 VI』（近畿音声言語研究会）、pp. 29-52.

須藤潤（2010）「否定の『うん系』感動詞の音調パターン」『音声研究』14（3）、pp. 40-50.

橋本進吉（1959）「日本文法論」『国文法体系論』岩波書店、pp. 71-158.

坊農真弓（2002）「プロソディからみた『うん』と『そう』」『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房、pp. 113-126.

森山卓郎（1997）「一語文とそのイントネーション」『文法と音声』くろしお出版、pp. 75-96.